

国際文化学部鹿毛敏夫教授の 「毛利秀包～久留米周辺でキリスト教保護～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2022年1月21日(金)

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

毛利秀包

毛利秀包は、永禄10(1567)年に安芸国高田郡吉田(広島県安芸高田市)で毛利元就の九男として生まれました。元龜2(71)年に5歳で備後の大田英綱の跡を継いで大田元綱を名乗り、天正7(79)年には兄の小早川隆景の養子となつて小早川元総、後に元包を名乗ります。

天正10(82)年、毛利氏は備中高松城を拠点に豊臣秀吉と交戦。本能寺の変を契機として和議が成立し、元包は人質として大坂の秀吉の下に送られます。その2年後には小牧・長久手の戦いに豊臣家臣として出陣し、秀吉から一字を贈られて秀包と改めました。

天正14(86)年、秀吉の九州出兵軍として出陣した秀包

は、その戦功によって筑後の3郡をあてがわれ、翌年7月、久留米に入りました。久留米での秀包は、九州最大の河川筑後川に面した久留米城を本拠とします。入城以前から堅固な構造だった城に、秀包はさらに改修を加えて、近世大名としての居城整備を実施しました。

さて、21歳で久留米に入城した秀包は、その年に豊後の大友義鎮(宗麟)の七女桂姫を妻として迎え入れます。「引地の君」と呼ばれたこの妻は、元来、大友氏から豊臣氏への人質として毛利家に預けられていたといえます。引地の入嫁は、激しい武力衝突の経緯を有する大友・毛利両家の融和を期した政略結婚と考えられるでしょう。

久留米周辺でキリスト教保護

キリスト教文化開花の地豊後出身の引地は、熱心なキリスト教信者でした。妻のあつ

い信仰心に強い影響を受けた秀包も、やがて信者に改宗します。その洗礼名はシマオ。



毛利秀包を祭神とする小早川神社の小祠(久留米城内)

秀包夫妻の保護の下、久留米とその周辺地域ではキリスト教布教が進められます。天正16(88)年には、秀包が宣教師ペドロ・ラモンを城に歓待してキリスト教の教理を学び、数日で36人の家臣が受洗しています。16世紀末の文禄年間、久留米周辺の信者は約300人と記録され、京都や堺出身のキリシタンが日曜日に信者を集めて教理を説いていたといえます。

しかしながら、秀包の下での久留米キリスト教界の繁栄は長くは続きませんでした。慶長5(1600)年9月に勃発した関ヶ原の戦いで、秀包は、石田三成側の盟主として兵を挙げた毛利輝元とともに西軍として出陣して敗北。戦いの後、改易され、京都の大徳寺で剃髪して入道名を道叱と名乗ります。

その後、体調を崩した秀包は、長門の赤間関(山口県下関市)で療養しますが、翌慶長6(01)年3月に病状が悪化し、35歳の若さで逝去しました。

(名古屋学院大学国際文化学部教授)

11月1回掲載